

鬼ごっこ文化の内発的発展とホスピタリティの諸相

(羽衣国際大学)中島智

Endogenous Development of Onigokko Culture and Various Aspects of Hospitalities
Hagoromo University Nakajima, Tomo

キーワード：鬼ごっこ文化・内発的発展・ホスピタリティ・スポーツ鬼ごっこ

■はじめに

伝承遊びである鬼ごっこは、今も子どもたちに伝えられ、保育・教育の場でも自発的な遊びの場でもその姿を見ることができ、2011年に改訂された学習指導要領で低学年のゲーム領域に「鬼遊び」が示されたことにより、学校体育の文脈でスポーツや運動能力の観点からも注目されてきている。しかし、スポーツ鬼ごっこの取組が象徴的に示すように、伝承遊びである鬼ごっこを継承し、競技化して多様な担い手が地域において活動を展開していくことは、単に教育やスポーツ上の意義をもつにとどまらず、地域社会に果たす意義や役割も大きい。そこで、本報告では、鬼ごっこ文化の発展過程を把握することを通して、鬼ごっこ文化の地域社会に果たす意義や課題を明らかにする。

子どもを取り巻くあらゆる文化、あるいは子どもたち自身が主に遊びを通して育んできた文化を「子ども文化」と呼ぶが、「鬼ごっこ文化」とはこうした子ども文化のうち、鬼ごっこ・鬼遊びに関連する事象のことを指すものと規定し、議論を進めたい。

■本報告の背景：

(1) 内発的発展論的視点による鬼ごっこ文化研究の必要性

欧米の近代化論に端を発する、環境問題や経済格差等に対する批判の高まりの中で、「目標を実現するであろう社会のすがたと、人々の生活のスタイルとは、それぞれの社会および地域の人々および集団によって、固有の自然環境に適合し、文化遺産にもとづき、歴史的条件にしたがって、外来の知識・制度・技術などを照合しつつ、自律的に創出される」（鶴見 1996:9）として、内発的発展論を提起したのは社会学者鶴見和子である。鶴見は、「ある地域または集団において、世代から世代へわたって継承されてきた型（構造）」と「伝統をとらえたうえで、「伝統の再創造」あるいは「伝統のつくりかえの過程」に着目することが重要であることを指摘している（鶴見 1996:29）。こうした内発的発展においては、その主要目標は経済成長ではなく、「人間の成長」（鶴見 1996:39）にあり、個々人の「生命から内発する力」（岩佐 2015:372）に注意を払うべきである。一方、それは、「発展の政策および戦略にかんするだけでなく、より身近な、暮らしのスタイルの工夫にも関わり」（鶴見 1996:11）、個人のライフスタイルの変革が社会変革につながっていく道筋を想定したものである。

今のところ、鬼ごっこ文化の研究は、主に保育学・体育学や児童文化論的アプローチからなされており、内発的発展論の観点からの研究蓄積はほぼ皆無であるのが現状である。しかしながら、このような観点に立てば、スポーツ鬼ごっこについても、こうした視点からそのあり方を論じる必要性があるといえるだろう。

(2) ホスピタリティ論的視点による鬼ごっこ文化研究の必要性

「ホスピタリティ」という言葉は、一般に相手を歓待し、もてなす思いやりや心構えとして認識されている。2020年東京五輪の招致プレゼンテーションを持ち出すまでもなく、「おもてなし」という日本文化に深く関わりと考えられる言葉も、ほぼ同義語として流布しているが、サービス産業におけるサービスの高度化や付加価値の創造といった文脈から離れて、日常的な対人コミュニケーションや地域コミュニティづくりといった観点から再考する必要があるだろう。たとえば、エドワード・S・モース（1838～1925）が明治期の日本を「子どもたちの天国」として描き、親切で明るい当時の人々の姿を書き残していることはよく知られているが、実はその根底には鬼ごっこ文化があったのではないだろうか。

■方法

本報告は、以上のような背景に基づき、一般社団法人鬼ごっこ協会が中心となって進めているスポーツ鬼ごっこの開発・普及活動に注目する。筆者は、2014年からスポーツ鬼ごっこを高等教育やそこでの地域連携に活用している。方法としては、筆者が関わった実践の省察を中心に、鬼ごっこ協会が公表しているホームページや研修会等での配布資料の分析を行うことで、鬼ごっこ文化の内発的発展の過程としてスポーツ鬼ごっこの実践を捉え直すとともに、ホスピタリティの視点からスポーツ鬼ごっこの意義に迫りたい。

■考察

スポーツ鬼ごっこの実践を内発的発展の過程として捉えるとき、重要なのは、子どもと大人の参加と協働による地域コミュニティづくりであり、その過程において文化を享受するとともに、遊び文化を創造していく力量を身に付けていくことである。その原動力となるのは、対等な関係性を基本とし、互いに相手の主体性を引き出し活かしあう〈わざ〉としてのホスピタリティである。具体的には、「競技や遊び」「大会や体験会など当日のイベント運営」「各地域の組織化ならびに日常的な組織運営」といった各層におけるホスピタリティをみることができる。今後は、それぞれの地域の固有価値を尊重し、子どもの遊び環境の改善、創造に向けた子どもの遊び文化としてのスポーツ鬼ごっこの可能性に注目する必要があると考える。

■引用・参考文献

- [1] 鶴見和子, 1996, 内発的発展論の展開, 筑摩書房
- [2] 岩佐礼子, 2015, 地域力の再発見: 内発的発展論からの教育再考, 藤原書店
- [3] 中島智, 2016, 地球倫理の実践としてのスポーツ文化, 地球システム・倫理学会会報第11号